

幼 稚 園

4月は新学期、幼稚園に入れるにも、就職のことを考えて入れなければならない時世である。はたして、親の思惑が子供心の十数年を支配できるかどうか疑問であるけれども――。

昭和33年度の学校基本調査によると、茨城県の幼稚園の幼児数は、男3,227人、女3,051人、計6,278人である。

この幼児たちは、昭和27・28年ごろに生れた子供たちであるから、その年の出生数を調べると、昭和27年53,241人、昭和28年49,959人で、この数字から見ると、7～8人に1人の割合で幼稚園のお世話になつていることになる。

全国の幼稚園の数は6,837、一番多いところは東京の836で、高知県の14、鳥取県の15が少い方である。



色

田 中 文 司

ふくいくとした梅の香りが寒風にもめげず、水仙のふくらみが霜の間からチヨツピリと顔をのぞかせて、春の訪れを告げると、大地は一足とびに、本当に、何時の間にか緑一色に染められて、私たちの目を楽しませ、心を暖めてくれる。ふだん事務室のみに閉じこもって外気に触れることの少ない私たちにとって、たまの休日などに、フト庭先の陽溜りの名も知れぬ雑草の緑に、春來るの感を強くし、新たに生命の躍動を覚えさせられるものである。

灰色に塗りつぶされる冬が私達の視覚からはなやかな明るさを塞いでしまうせい、身心まで何となく重く沈んで薄てついてしまうような感じになるが、一たび梅がほころび、葉の花の目を射るような黄色と甘い匂い、桜のはなやかさの候になると、身も軽やかに、心も上づいて口笛の一つも吹いて見たいようなうきうきとした気持ちになつて、明るい希望を自覚させてくれる。

●黄みどりに大地を刷いて燕來る●

色彩……色こそ視覚を透して人の心に慰めと、安らぎと、愛情を、知らず知らずに育んでくれるのではないだろうか。

冬の白、灰、黒などの無彩色の沈んだ暗い色、常緑樹にしても、黒ずんだ緑、褐色の混じつた汚らしい緑の暗色が多いのであるが、これが一変して春ともなれば、鮮やかな緑、黄、ピンクなど明るい衣裳に衣換えして、柔らかなふりそそぐ太陽の下に、生きとし生きるもの、みな青春を賛美する。正にわが世の春來るである。もつとら安サラーマンにとって、厚物を脱ぎ棄てて薄着になるのは経済の面も多分にあるからかも知れないが？

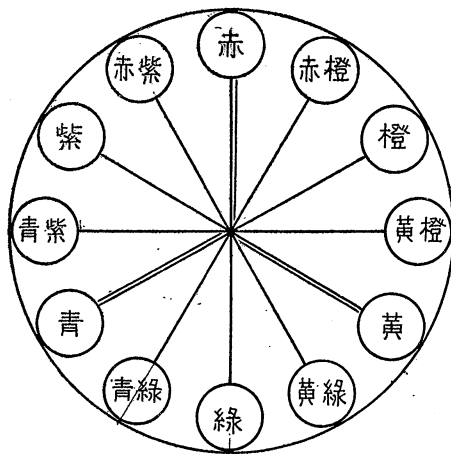
●人は絶えず変化を求めぬ●そこで流行という言葉が生れてくるのであり、私達の身近かの一番色彩に關係のある洋服地なども、この流行に追われて、年々新しく研究、考案された新柄が色とりどり店頭を飾つて、街行く人を羨望させ、安給料取りの悲哀を痛感することになる。今年の流行色は、去年の流行色が或る色に煙草の煙をフーと吹きつけたような多少ぼやけた色であつたのが今年はそのヴェールを取り去つた、はつきりした、ピンク色などのように明るい鮮かな色に変つているようだ。これは此の方面の学のある人達が、いろいろのこれに關した統計のデータによつて観察し、分析してすでに昨年から判つているのだそうである。このように統計からその年々の流行色が生み出され、商店のウエンドーから、街をかつ歩する時代の先端を行く若い人達から次々に流行して行くことになる。

日本人に一番よく似合う色は紺色だそうだ。これは肌の色が黄どう色だからそうである。そう言えば、私もそうだが、身近な人々の洋服に何と紺系統が多いことか、余程先練された人でないと、極端な色の洋服は非常に氣ざつぽく、厭味を覚えさせられるのもこのためかも知れない。自信のある人は別としても、私たちは無難な紺系統か、比較的日本人の趣味に合つている茶系統か、ねずみ色等の洋服が無事ではあるまいかと考える。

フランスのことわざに、●色が合つていれば体に布を当てただけで結構●だという言葉があるそうだ。常に新しいモードはフランスからと言われる程、色に対する美的感覚が発達しているのだろう、美術家や、服装家、美容家達が、フランス帰りを得意顔とするゆえんでもあ

う。

統計に従事している私たちにも、色彩に関しては、統計図表を描く仕事がある。業務用は普通彩色の必要はないが、展示用の図表はその目的が人に見せるためのものであるから、その色彩によつて見る人に与える影響が多いわけであり、単に色を塗ればよいという心でなく、見る人を引きつけるような心構えをもつて、見る心を起させるように彩色すべきであろう。だからといって、余りけげばけげしくしては厭味を感じさせるし、余り地味過ぎても、折角の努力が半減されて、目立たない存在になってしまう。彩色に当つては、(1)色相、(2)明度、(3)採度の三要素をよく調和させて描くように注意しなければならない。そこに配色の苦心が生じてくるのである。



色環

○三原色……赤、黄、青

○二次色……三原色を基にして。

赤+黄=橙、黄+青=緑、青+赤=紫

○三次色……二次色と、それらの原色の一方を混ぜると赤橙、黄橙、黄緑、青緑、青紫、赤紫の六色ができる。

これを図示したのが上記の図表で、これを色環という。

この色環で、赤紫から黄緑までを暖色、青緑から青紫ま

でを寒色、緑と紫は中性色といわれるものである。赤と赤紫、黄と黄緑のように、各隣接した色の関係を近似色といい、さらに各色と相対した色(たとえば赤に対する緑、青と橙、紫と黄のような)を対色という。

この色環による配色についてみると。

暖色は暖い感じの色であり、そればかり使つて描くと絵が暑苦しくなり、見る人をすぐあきさせるし、寒色は冷い感じの色であるからそればかりで描くと、さむざむとして人眼を引きつけない、又近似色ばかりで描くと落ちついた絵はできるが、渋すぎて迫力が足りなくなる。対色を乱用すると、絵がけげげばとして、毒々しくなり安つばい感じを与え、低劣な趣味を発散されることになるから、彩色に当つては以上の関係を充分心得置いて

(1) 暖色に寒色を添え、寒色には暖色を配する。

(2) 近似色で描いた一部に対色を加える。

(3) 対色で描く場合は一方を大きい部分に用い、他方を小部分に用いるようにする。

以上の三要件に注意して、描くと明快な絵ができる。要するに近似色で大体の調子をととのえ、対色を用いて力をつけると、落ちついたしまりのある図表となるわけである。なお実際の図表作成に当つては、その人の個性や、好みなどにより、勘によつても立派なものができることであろうが、初心者私たちにとつては、この色環を基本としての配色方法をよく研究して、展示用グラフとしての、使命達成に努力して、より一層豊かなうおひのある図表を作りたいと考えている。

以上は、先日全統連主催の統計図表指導者講習会に、おこがましくも出席し、特に面白く拝聴した、千葉大の森教授の『色彩学の基礎知識』より、編集者の命によつて、私の貧弱な頭脳により捕えた、色々についてのことを参考として拙文を綴つた次第である。図表作成の上は何等かの、参考になれば幸である。